

速報「長野県の遺跡発掘 2015」講演会

「卑弥呼の時代からヤマト王権へ ～その時、シナノに何が起きたか～」

大塚 初重(明治大学名誉教授)

【要旨】

日本考古学・古代史研究上、古くから話題に登場するのが邪馬台国論である。中国の歴史書『三国志』の中の「魏書東夷伝倭人条」に、邪馬台国の名が登場し、倭の女王卑弥呼が都としている場所が邪馬台国だと記している。この卑弥呼が魏の景初3年(239)に遣使を送り皇帝から「親魏倭王」の金印や錦、銅鏡百枚、真珠、鉛丹などを賜わり、翌年の正始元年(240)に使節が帰国したことを記している。記録はすべて中国側の記述なのであるが、日中外交の具体的な年号は信頼すべきものに思う。しかし魏志倭人伝記述の倭国の世情や風俗などすべてが正確な記述なのかどうかは検討すべき点があると思われる。

さらに難しい問題は邪馬台国の所在地についてである。魏志倭人伝に記載されている「郡(帯方郡)より倭に至る」旅程の解釈の仕方によって、邪馬台国の位置論に大きな変化が生じることは一般的によく知られていることである。邪馬台国論といえば九州説と畿内説とがあり、ほかに岡山・島根・四国・愛知・千葉・甲信越・岩手など全国各地が候補地となっている。

しかし考古学上の調査・研究は進行しており、とくにその年代観の進展は弥生時代と古墳時代の捉え方に変化を及ぼしており、列島内の考古学状況の理解に新しい視点が生まれつつある。大阪府池上曾根遺跡における年輪年代学上の弥生時代中期後半代の年代が、従前よりも約50年～100年ほど古くなることが認められた。従って弥生時代後期の所属年代は紀元1～2世紀代となり、前方後円墳が出現する年代は3世紀中頃と考えるようになってきた。

「魏志倭人伝」の記述の中には正始8年(247)の魏側の動静と倭国への使者到来のことがあり、卑弥呼の死と造墓のことが記してある。一般的にはこ

の正始 8 年 (247) には卑弥呼が亡くなったと理解されている。年代論から考えれば 3 世紀の後半頃の大型古墳となれば、奈良県桜井市の箸墓古墳 (280m) が例証となる可能性がある。

青銅器の列島内の分布状態も邪馬台国研究では重要な視点となる。青銅器や鉄器の存在形態から北部九州の優位性が古くから論じられてきたが、卑弥呼登場の 2 世紀後半代の列島内の青銅器分布状態も注目されてよい。

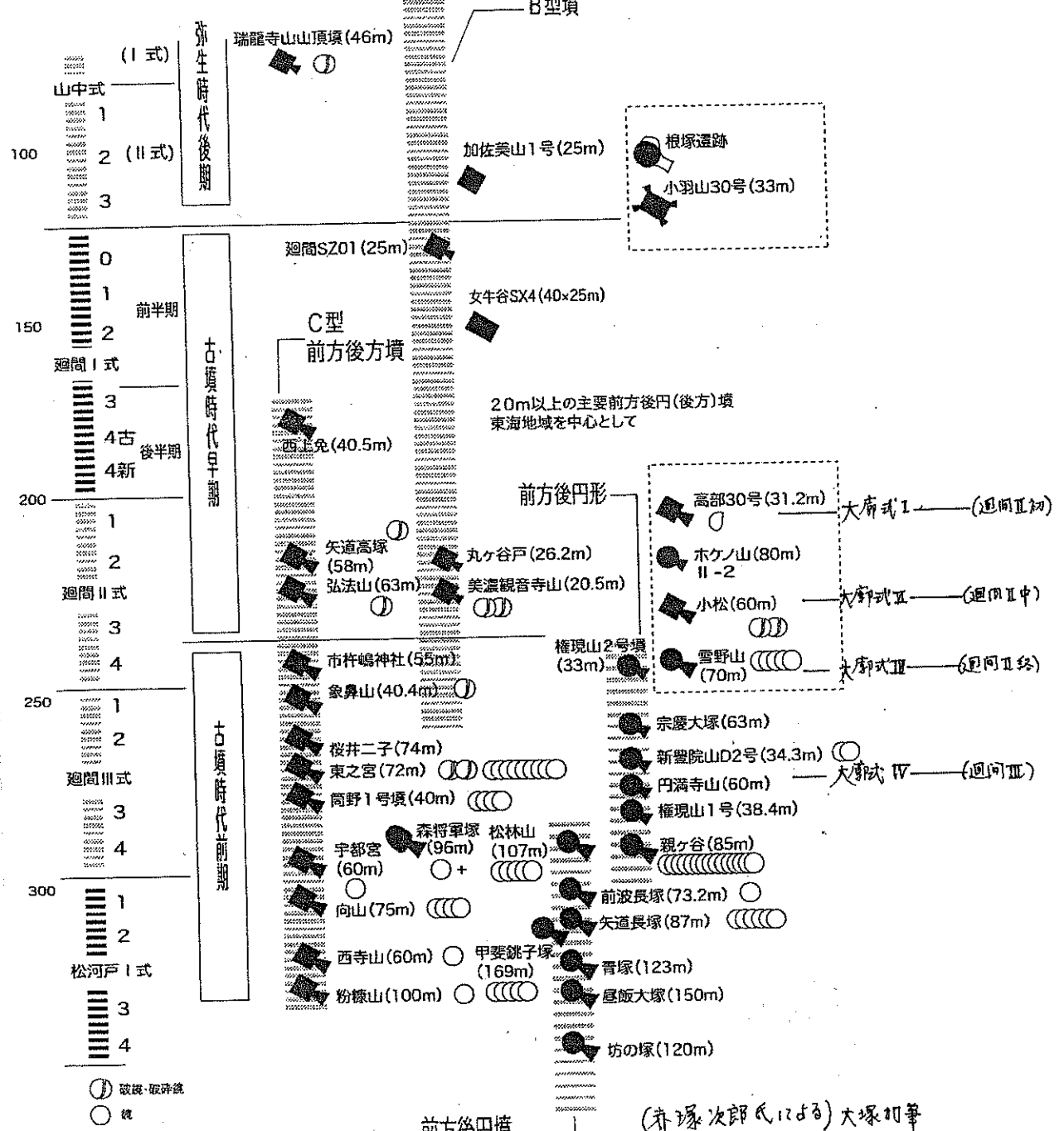
2007 年 (平成 19) 10 月、東日本の長野県中野市柳沢遺跡で千曲川の堤防整備工事中に、銅戈 8 本と銅鐸片 5 個分が発見された。弥生時代中期後半での青銅祭器発見の北限例であった。近畿地方と北九州で執行されていた青銅器祭祀と同様の祭祀が、遠く離れた信濃国においても執行されていたことを推測させ、列島内の各地で共通したムラの祀りが実行されていたのであり、同じ社会体制、思想体系が維持されていたと思う。弥生時代中期段階の北部九州・瀬戸内・山陰・北陸・近畿地方で同パターンの祭祀が行なわれていたということになる。180 年代～240 年代頃の卑弥呼の時代には、日本列島では広汎な地域で青銅器を用いた祀りが行なわれていた。卑弥呼共立以前において、紀元前 2 世紀か 1 世紀に、九州や近畿の祭祀形態は東日本の長野にまで及んでいた可能性が高いと思われる。

最近、長野県では長野市塩崎遺跡群で弥生時代中期の礫床木棺墓が調査され、管玉 31 点が SM1027 号墓から出土して注目されている。また長野市浅川扇状地遺跡群からは弥生時代終末期の大型方形周溝墓が発掘され、古墳出現を考える重要な遺跡となっている。佐久市西近津遺跡群では青銅製銅釧 9 点が出土し、東国における弥生時代後期の一様相を示すものとして注目される。

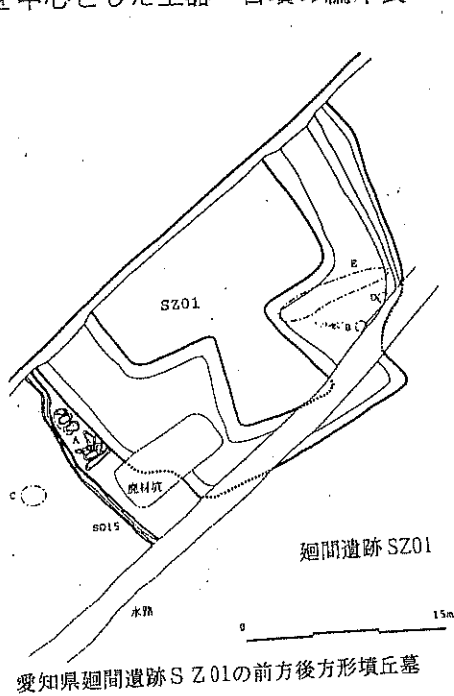
長野県松本市弘法山古墳や中山 36 号墳が近ごろ注目され直している。また沼津市高尾山古墳の出土鏡をめぐる問題、大廓式土器の広汎な地域への伝播も、邪馬台国論に大きな波紋を投げつつある。

最近、東海地方から東京湾沿岸地域をも邪馬台国の領域だと理解する東日本の研究者は多い。列島内の弥生時代中期後半から後期段階における人とモノのダイナミックな移動・交流状況も、邪馬台国が何処にあったのかを推測する重要な手がかりになるのではないだろうか。列島内全域の弥生時代中期から後期段階の歴史的な状況を考えると、邪馬台国の歴史の歯車は瀬戸内東部・四国と大阪湾沿岸地域と、さらに山陰・北陸など日本海沿岸地域を含めた広汎な地域の動きの中から動き出した可能性が濃いのではないかと思っている。

濃尾平野土器編年

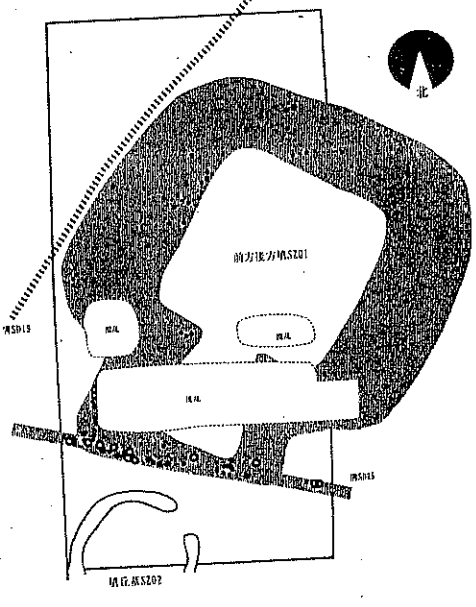


濃尾平野を中心とした土器・古墳の編年表

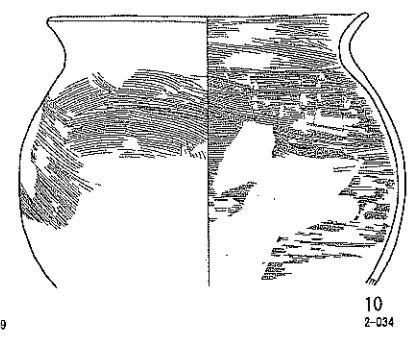
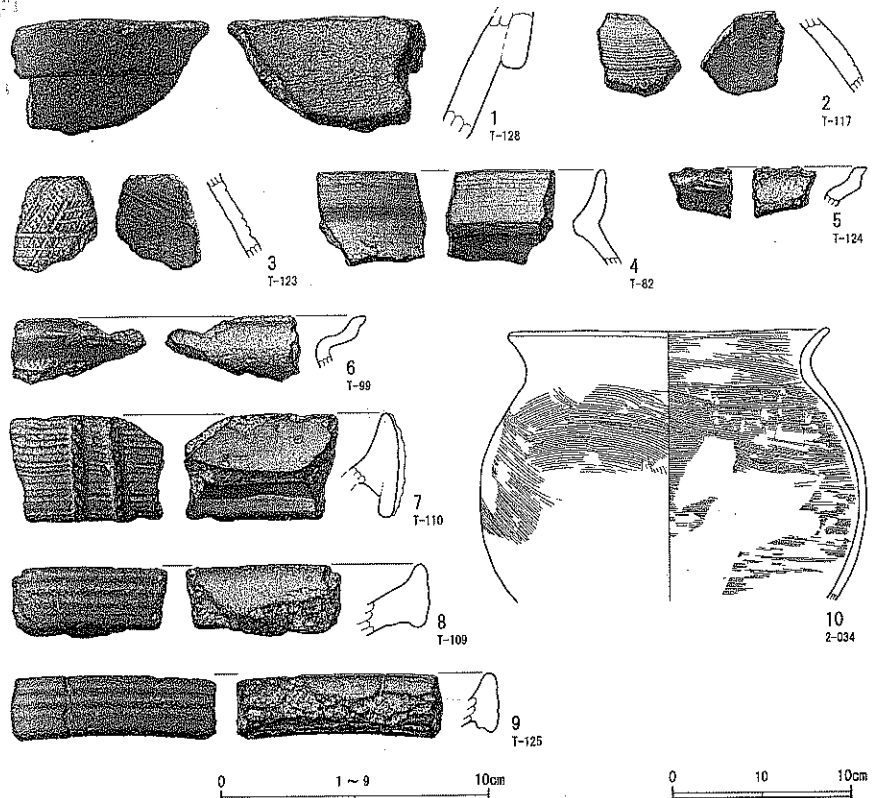
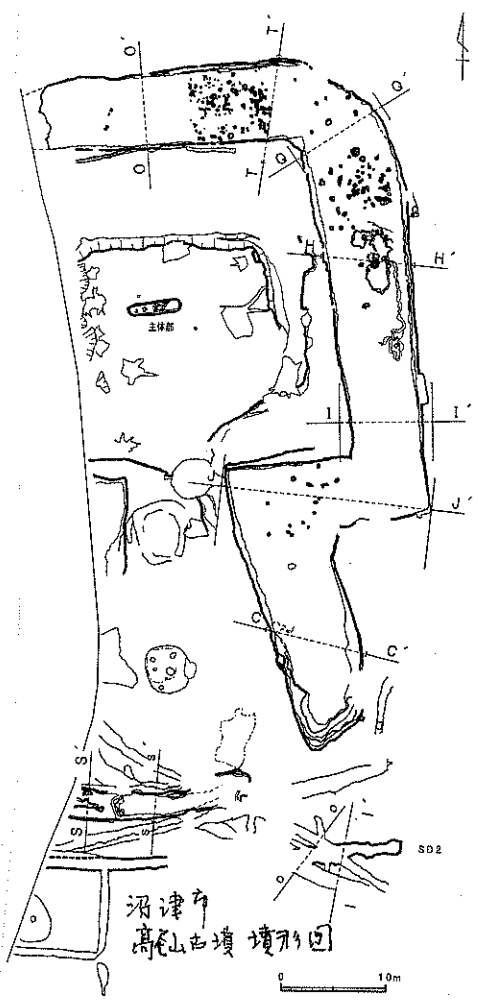


愛知県廻間遺跡SZ01の前方後方形墳丘墓

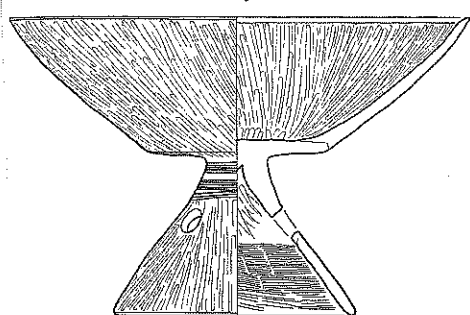
前方後円墳 (赤塚次郎氏による) 大塚訂正



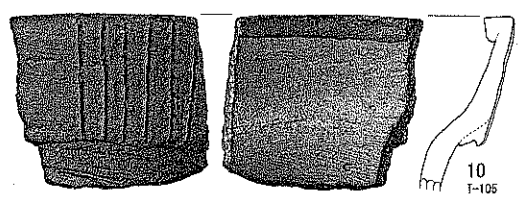
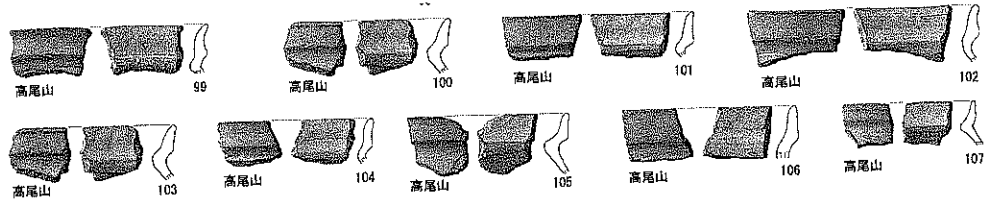
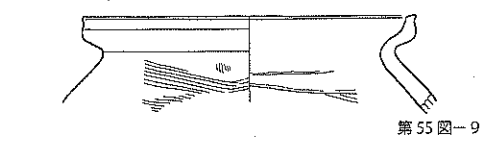
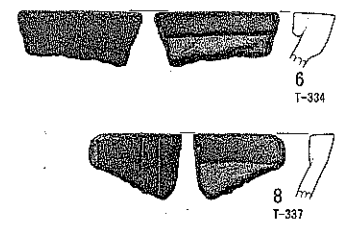
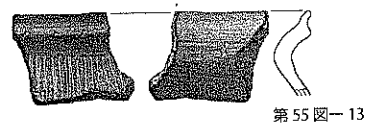
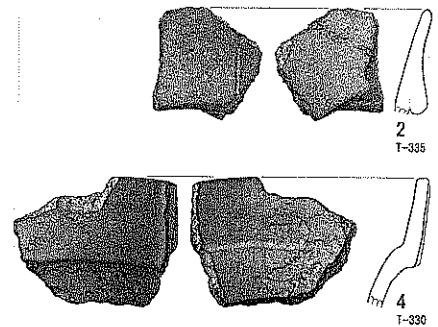
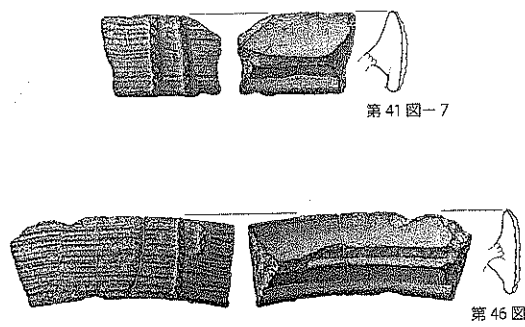
愛知県西上免遺跡の前方後円墳



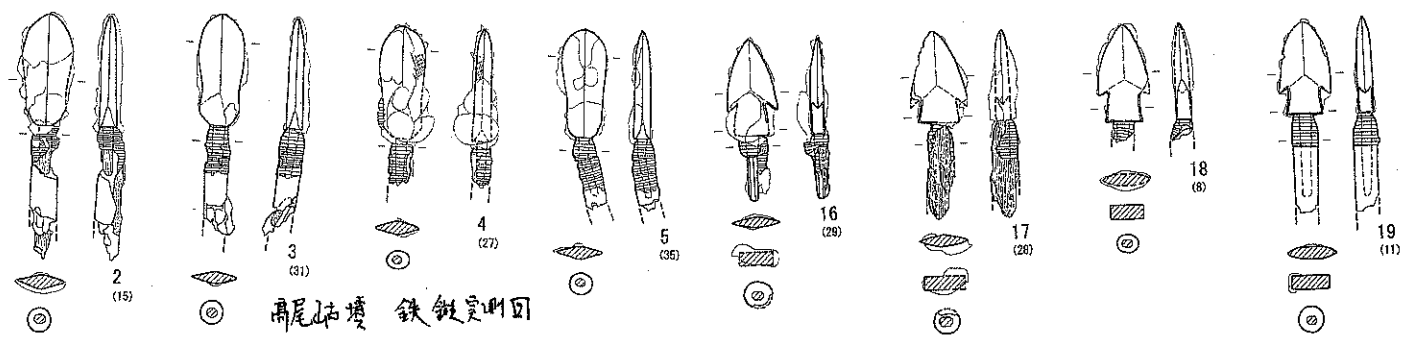
第41図 棺外および墳丘出土土器実測図 高尾山古墳報告書より



外束系土器(大鉢型)

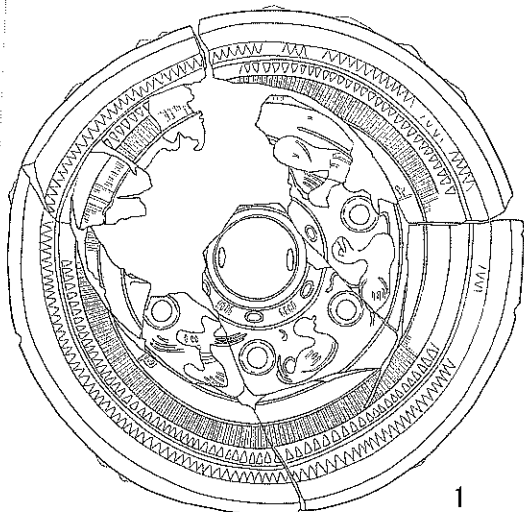


北陸系土器

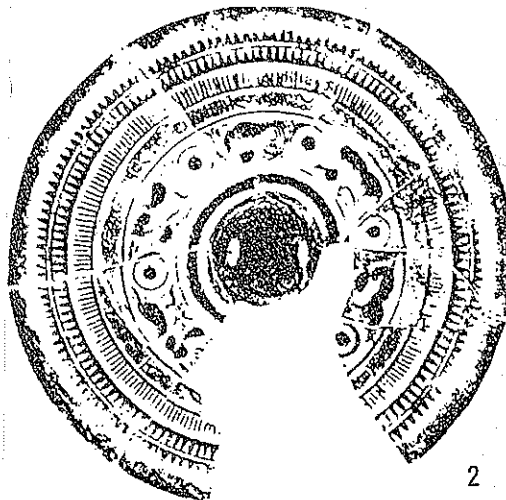


墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	副葬品					
				鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鍬	工具
高尾山	静岡県	■	61.7	浮彫式獸帯鏡 1 (破砕鏡)	勾玉 1	-	2	鉄鍬 32 (柳葉、腸扶三角、長三角)	鈍 1
弘法山	長野県	■	63	浮彫式獸帯鏡 1	管玉 2 ガラス小玉 738	1	2	銅鍬 1 (柳葉) 鉄鍬 24 (柳葉、定角)	鉄斧 1 鈍 1
高部 32号	千葉県	■	32	浮彫式獸帯鏡 1 (破鏡)	-	-	2	-	-
高部 30号	千葉県	■	34	二神二獸鏡 1 (破砕鏡)	-	2	-	-	-
神門 5号	千葉県	●	(42.5)	-	ガラス小玉 6	1	-	鉄鍬 2 (多孔)	-
神門 4号	千葉県	●	(49)	-	管玉 31 ガラス小玉 394	1	1	鉄鍬 41 (定角)	-
神門 3号	千葉県	●	(53.5)	-	管玉 10 ガラス小玉 103	1	1	鉄鍬 2 (柳葉)	鈍 1

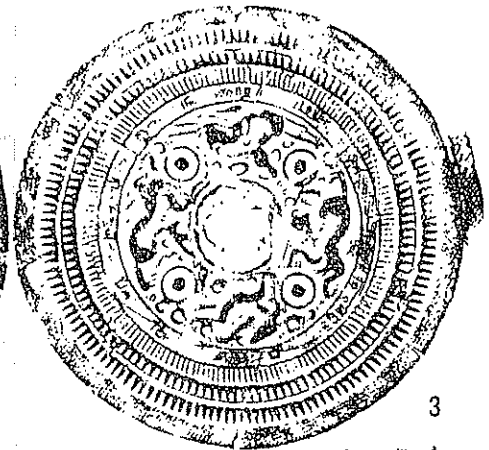
●：前方後円墳、■：前方後方墳 / 括弧内の数値は復元値。



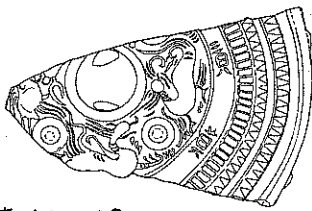
1 静岡・高尾山古墳 上方作獸帯鏡



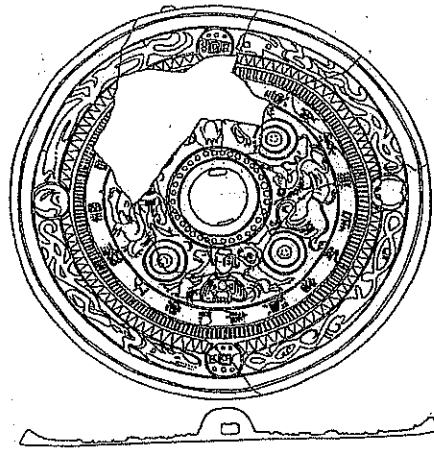
2 長野・中山36号 上方作不獸帯鏡



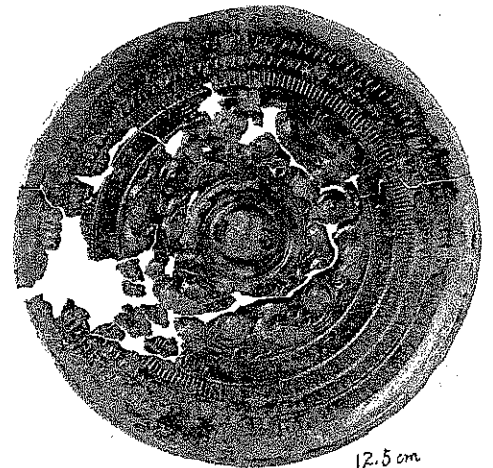
3 長野・弘法山 上方作不獸帯鏡



4 千葉・高部 32号 斜溝甲内面獸帯鏡

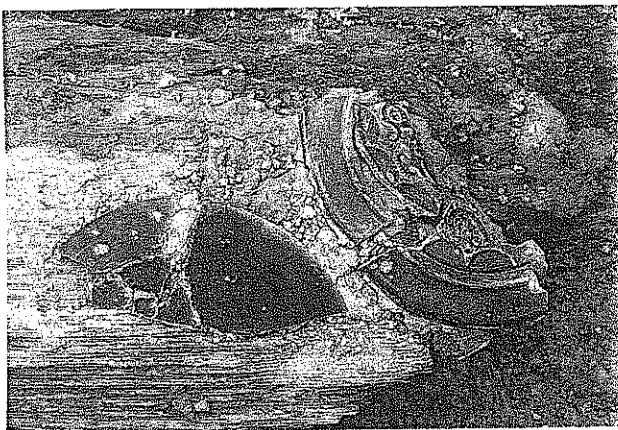


千葉高部 30号墳出土二神二獸鏡



12.5cm 徳島・西山谷2号 上方作克武蓋鏡

0 10cm

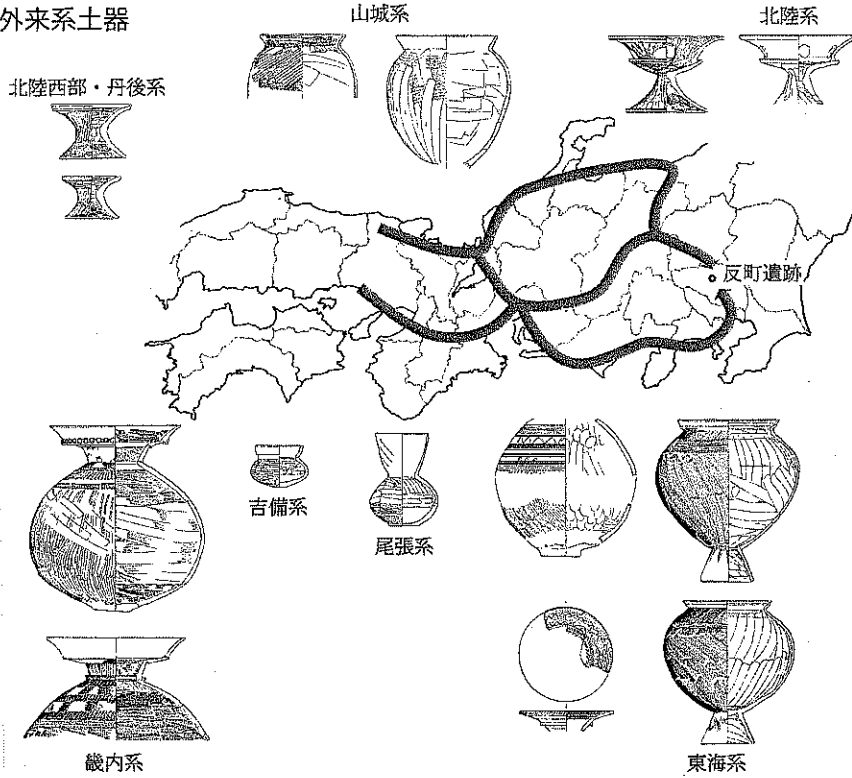


新潟村黒田 双頭竜鏡 12.2cm



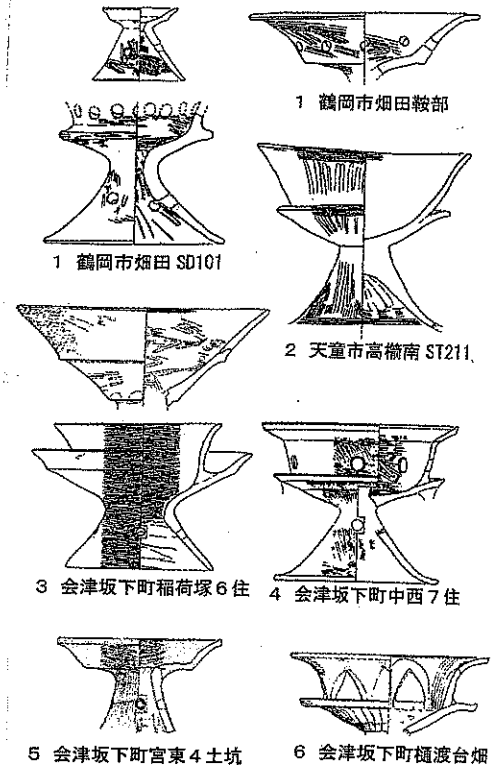
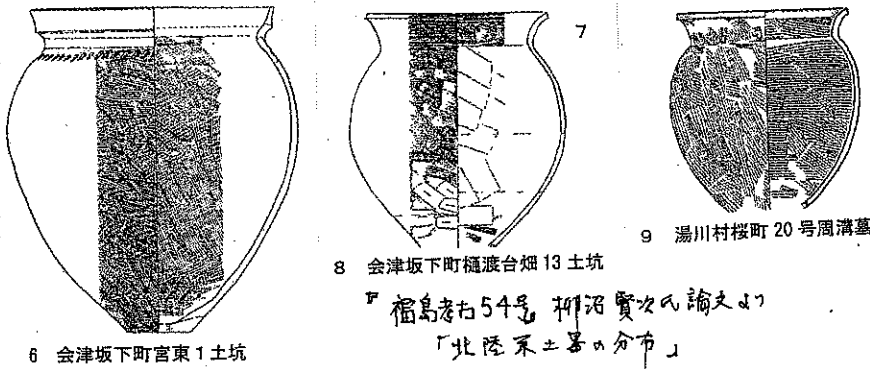
國文帯神鏡 静岡山 39号 長巻長刀の帯 径 11cm

外来系土器

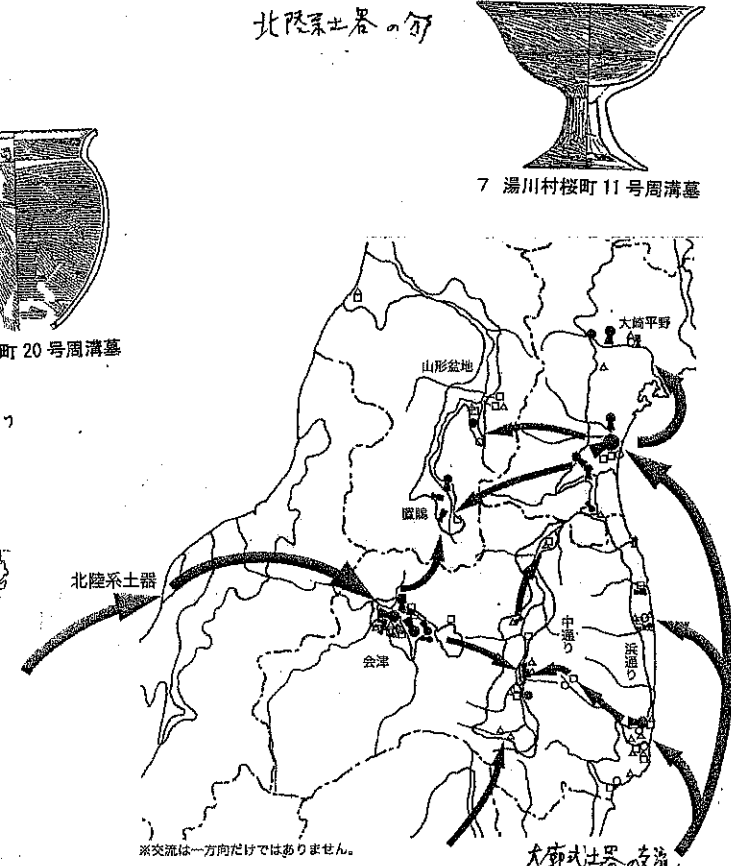


外来系土器模式図

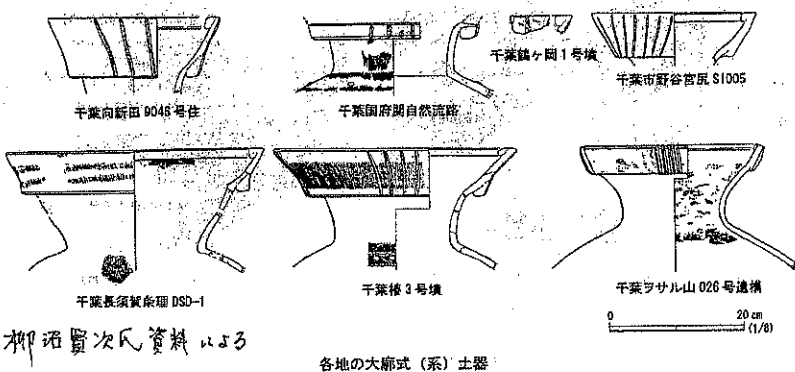
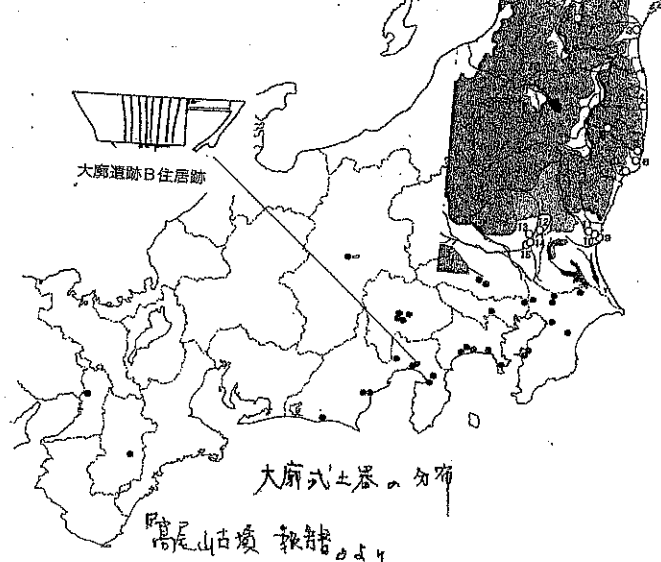
埼玉県埋文事業団 報告 380 『反町遺跡Ⅱ』, 2011



北陸系土器の分布



古墳時代前期に静岡県東部の沼津周辺で作られ始めた大甬式土器は、口縁部の内側が厚く作られるのが特徴です。その分布から、主として海岸線沿いに交流のあったことがうかがえます。
※分布図は 高梨 1997・原田 2002・米倉 2010 を基に追加作成。



各地の大甬式(系)土器